慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	H・S・ヒューズ著『意識と社会』: ヨーロッパ社会思想の方向転換(一八九〇 - 一九三〇年)
Sub Title	H. Stuart Hughes : Consciousness and society
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1963
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.36, No.1 (1963. 1) ,p.122- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19630115-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

H. Stuart Hughes:
Consciousness and Society
The Reorientation of European Social Thought, 1890–1930.
London, Macgibbon & Kee, 1959,
xi+433+xv pp.

H・S・ヒューズ著

『意識と社会』

――ヨーロッパ社会思想の方向転換（一八九〇―一九三〇年）――

『意識と社会』という標題の意味は、思想家の社会に対する主体的態度、つまり意識の問題の研究である。本書の副題は、ヒューズのいう一八九〇年代の世代にあらわれた思想態度、いわゆる世紀末(fin de siècle)から今世紀三十年代における大恐慌にかけてのヨーロッパ、ここではとくにドイツ（オーストリアを含む）、フランスおよびイタリアの思想に顕著に示される方向転換を意味する。この時期の思想史の舞台に登場した dramatis personae の思想状況を析出しようとするのが本書のねらいである。二十世紀の開幕のとき、三十齢を超えていたヨーロッパの思想家たちは、まさに《天才の群像》であつた。ヒューズは、この「高次のレベルでの初発的形態における主要な観念」（一一頁）と取り組んでゆく。そこでまず、最初の章「若干の予備的考察」に基づいて、本書の研究主題とヒューズの思想史研究者としての思想的立場をあきらかにしておこう。

一八九〇年から一九三〇年までの四十年間は、思想活動のひとつの型が終りを告げ、他の違つた型が開始された移行過程であり、まさに思想的エポックを形成している。そのもつとも決定的なことというと、人間行動における非合理的動機づけの発掘作業が、人間を理性的・論理的に計算する動物以上のもの（あるいは以下のもの）として新しく定義し直したことである。ということは、ヨーロッパの思想的伝統である啓蒙主義の哲学の破紋を意味する。ヒューズはつぎのように述べている。「一八九〇年代の世代の恒久的な重要性を評価するにあたつて、われわれはかれらの業績の中心をなすパラドックスをたえず銘記しておく必要がある。つまり往々にして、かれらの仕事は、かれらの大多数のものが強度に敵対的であつた当の反知性主義をうながしてしまつたということを」（一七頁）。じじつ、かれらは反啓蒙主義的感情に深く魅せられていたとしても、かれら自身は啓蒙主義の子であつたのである。そしてヒューズ自身も、「わたくし自身の立場は、まつたく意識的に十八世紀の啓蒙主義である」（二七頁）と宣言する。われわれは、この時期の思想の方向転換を分析するヒューズの意識のうちに、啓蒙主義の哲学に立帰つて思想の再転換をあえて提示しようとする激烈なパトスをうかがうことができるであろう。(1)

この世代に属する人びとは、それぞれ同じような心理的マレーズ

を体験しつつ、思想的観念形態のヴァリエテを展開している。したがつて、ヒューズはその広がりを、ヒューマニスティックな一般的教育を身につけた人びとの社会的・道徳的観念の共通なたくわえに限定し、しかも観念形態そのものの定型を研究するというよりは、むしろ思想家個人としての思想に焦点をあわせつつ、分析をすすめている。すなわち、第二章　一八九〇年代の一〇年――実証主義への反抗、第三章　マルクス主義批判、第四章　無意識的なものの回復、第五章　ジョルジュ・ソレルの現実探究、第六章　歴史におけるネオ・イデアリスムス、第七章　マキアヴェリの後裔――パレート、モスカ、ミヘルス、第八章　マックス・ウェーバー――実証主義とイデアリスムスの超克、第九章　ヨーロッパの想像力と第一次世界大戦、第十章　一九二〇年代の一〇年――分裂点に立つ知識人、われわれは、これらの各章を通じて、現代を特徴づける諸思想が形成された軌道を、苦しみと闘いの思想家たちにあざやかに跡づけることが可能であろう。

ニーチェがブルジョワ文明の物質的プログレスを逃れて、アルプスの山嶺にひき籠つてしまつたことは、象徴的意味をもつている。けだし、一八九〇年代の若き反逆者たちは、実証主義的思考――それは唯物論、機械論ならびに自然主義、とくに社会的ダーウィニズムと同義的であつた――に対して、《自由に思索する精神》の復活を目指していた。とりわけドイツにおいて、ハイデルベルグ、フライブルグ、シュトラッスブルグ、バーゼルの諸大学、いわゆる《ライン上流の文化圏》には、反実証主義的傾向がもつとも顕著にあらわれていた。ヴィンデルバントおよびリッケルトの名をもつて知られる西南ドイツ学派、ウェーバー、マイネッケ、トレールチなど、かれらはそれぞれの方法で、力点のおき所を異にするとはいえルビコンの橋を渡つていつたのである。ヴィーンではフロイトが精神分析学を創始する。フランスはそのリベラルな知的生活のために、かえつてこのような思想的巨人を輩出しなかつたが、ベルグソン、ソレル、ペギーのごとき有能な人物がパリで華々しく活躍していた。九〇年代のイタリアでは、ローマは僧侶、官吏、観光客の都となり、学問の中心地はむしろ地方都市にあつて、フィレンツェではパレートが、ナポリではクローチェがすぐれた知的貢献をなしていた。

これら思想家たちに共通する新しい問題関心は、意識の問題と無意識の役割、意識と関連して心理学、哲学、歴史、文学における時間と持続の意味、そしてさらに意識と時間を含む《精神科学》の問題、人間行動の背後にひそむ主観的なるものの探究である。そしてこの探究の「精神は、……実証主義的方法の枷から自由になつて」(六六頁)、自由に想像し、創造する精神となつたのである。また、九〇年代の人びとは、マルクス主義を批判的媒介としながら、各自の固有な思想を形成していつたことは注目に価する。かれらがマルクス主義に関心を抱きはじめた理由のひとつは、マルクス主義自体の教義の危機にあつたことも興味深い。すなわち、その科学＝理性の側面と道徳＝情念の側面との反立がしだいに顕在化し、政治的場面では、当時ヨーロッパ社会主義政党内部に《修正主義者》と《革命論者》との決裂を生みだしていた。このように、マルクス主義の

思想的アンビバレンスから、思想家たちはさまざまなものを引き出したわけだが、いずれにせよ「マルクス主義研究は、かれらに一種の実験場――社会科学の一般的法典とマルクスの原典との出会いから生じだしたもつとパーソナルな理論との初期的テスト――を提供した」（七四頁）ことは重要な意義をもつ。デュルケームは社会主義の道徳的問題にふれ、マルクス主義に社会科学者の良心を探る。パレートはマルクス研究を通つて、《階級闘争》理論に社会学的部分としての真理を認めつつも、エリート理論に到達する。クローチェはマルクス主義の史的唯物論と取り組み、結局はその歴史の法則性を拒否してしまう。ソレルはマルクス主義の科学的命題に不感症であり、むしろ人間の情動に価値をおいて、社会詩としてのマルクス主義を強調する。(2)

ベルグソンの哲学は、そのリズミカルなフランス語の詩情によつて、かれを教祖的存在にまで高めたのであつたが、かれの《深層意識》の解明は、やがてフロイトの《無意識的なもの》の精神分析にとつて代られ、フロイトの栄光の陰に殆んど忘却されてしまう。科学的・経験主義的な臨床医学的方法は別としても、《無意識》の非論理的論理の風変りなこの哲学は、思想史のうえで、人間精神に対する深い洞察力を含んだものである。フロイトは晩年にいたつて、社会における人間の問題に注意を向ける。かれの社会理論は、人間の条件は無意識的衝動によつて固定されている、という否定的運命性を強調しがちである。そして、人間の攻撃的・破壊的本能は、現代の文明的危機においてますます真実であるように思われ、文明と罪意識との弁証法がわれわれになにか不幸なものを感ぜしめずにおかない。にもかかわらず、無意識の発見に加えて、人間の隠れた性行為の研究をおこなつたフロイトは、啓蒙主義の破壊者ではなく、逆にかれの人間理性への信仰がたんなるイリュージョンではなく、人間性についての豊饒な知識を明るみに出し、他の思想家にもまして、かれを偉大な啓蒙主義の子たらしめているのである。

「ソレルの精神は、二十世紀初期の殆んどあらゆる新しい教義が吹きすさぶ風だまりの交叉路であつた」（一六一頁）。哲学者、歴史家、社会学者、プロパガンディスト、それに職業としての土木技師、心情としてのフランス的モラリスト、ソレルという人間はまつたく独自の存在である。かれの中心課題とは、労働の工作を尊重する人生体験に基づき、《人工的》自然、《人工的》世界秩序を創造する実践行動であつた。ゼネラル・ストライキの神話こそ、人工的な構成物にほかならない。ソレルの《神話》概念は、ウェーバーの《理念型》と似通つているけれども、かれの立場は、政治的実践と抽象的理論とを区別せず、この点で哲学的プラグマティズムにより近い。思想家として理論を体系化することなく終り、実践においてもムッソリーニやレーニンに直接影響をあたえることもなく、西欧デモクラシーの価値規準からすれば、かれの態度はまさしく道徳的・政治的な永遠の病いでもあつたろうが、われわれは、ブルジョワ的凡俗性に向けられたソレルの情熱的敵意を充分理解しなければならない。ヒューズの指摘するように、問題に解決をあたえる思想家ではなく、問題を提起する思想家、ソクラテスとかニーチェに連なる批判的思

想家、それがソレルの現代的意義ともいうべきであろう。

歴史と社会の研究について、ドイツ観念論の伝統はつねに指導的役割を果してきた。このドイツ的思惟を単純な原理であらわせば、Naturwissenschaft と Geisteswissenschaft の区別である。後者は具体的事実研究と歴史哲学という二つの方向をとるが、ドイツでは両者の中間的レベルでの理論化が見逃されがちである。たとえば、ランケのうちには、事実探究の歴史家と形而上学的ロマン主義者とが混濁して、不分明のまま取り残されている。しかし、ランケの弟子たちが実証主義者とかわり無くなり、歴史研究が新たな課題に直面したところに、ディルタイの《精神科学》という思惟が、文化、社会、歴史の研究領域に方向づけをあたえたのであつた。やがてクローチェ、マイネッケのような卓越した歴史理論家が生れる。クローチェはドイツ観念論を継受して、歴史家による歴史の追思惟、あるいは歴史的事実の想像的創造行為を説く。トレールチおよびマイネッケは、ドイツ歴史主義とその相対主義的インプリケーションをめぐつて、歴史理論を展開してゆく。前者は、ヨーロッパ的価値の綜合を目指して失敗し、ついに歴史自体から発顕する Ethik に途を見出そうと努力する。後者は、国家権力と倫理の問題に取り組み、和解しがたい否定的結論に導かれざるを得なかつた。しかしながら、ドイツ現代史がみずからこの結論を肯定してしまつたとき、マイネッケはナチズムの現実から精神の世界に逃れて、自己の魂の声を聞くほかなんら妥当性のない絶対的価値にたどりついた。最後に、戦後祖国の廃墟に佇んだかれの精神は、まさにワイマールがポツダムに、ゲーテがビスマルクに勝利したことを認め、ドイツ観念論から啓蒙主義の伝統に復帰したわけである。

パレート、モスカ、ミヘルスは、支配者と被支配者とのシャープな区別、権力の役割、政府の欺瞞、政治集団と政治制度の不可避的堕落などを主張した点で、マキアヴェリアンである。今日の政治的・社会的支配エリートの概念は、この三人の思想家に由来することはあまねく知られている。ミヘルスの《寡頭制の鉄則》は、エリート概念を社会党と労働組合の組織に適用したもので、それは、かれ自身の経験によつて発見された真理の法則化にほかならない。さらに、パレートの《派生体》、モスカの《政治的公式》は、政治的合理化作用についての現代にとつて有効な仮設である。ここで問題となるのは、これらネオ・マキアヴェリアンがファシズムの抬頭にどれ程責任を有するか、ということである。パレートについては、ローマ進軍とかれの死とのあいだの十カ月間、すくなくともファシズム体制を支持したといわれる。ミヘルスはそれ程著名な学者でもなく、むろんデューチェ自身かれを知ろうはずは無かつた。モスカは、クローチェとともに、ファシスト的権威に反対し、デモクラシーを擁護していた。

一八九〇年代の思想家のうちで、もつとも昏迷した、ポレーミッシュな人格はマックス・ウェーバーである。観念論と科学的方法、経済と宗教、マルクス主義とナショナリズム、政治的係り合いと認識の《客観性》、一見矛盾したこれらの諸要素が、かれの思想的苦悩と闘争のうちに反映している。今日われわれは、ウェーバーを社会

学者と考えているけれども、かれの遍歴をみると、法律学者として学究生活を出発し、経済史・社会史の研究に移り、フライブルグ大学に職を得たとき、またハイデルベルグ大学に招聘されたときは経済学を講じ、晩年ウィーン大学の訪問教授となり、その後ミュンヘン大学の教授となつてから、社会学を担当したのである。こうした思想発展こそ、そのうちに知的矛盾を内包しつつ、ウェーバーの綜合への英雄的努力を証明するものである。一八九八年のはじめ、かれは神経症におそわれたが、それは知的過重に耐えかねての病疾であつたと同時に、かれの生活そのものに根差すエディップス的状況に起因するところも大であつた。それゆえ、「われわれは、現代のもつとも緻密な社会理論が、古典的なフロイト的タイプの未解決な神経症の間接的結果であつた、という不条理な疑念の状態におかれている」(二九八頁、傍点原著者)というのも、皮肉なことである。マリアンネとともにローマで療養の日々を過したウェーバーは、やがてハイデルベルクに復帰したが、その後十五年間は教鞭をとらず、病気の再発を危惧しつつも、学問的にはもつとも生産的な仕事をつづける。ウェーバーの方法論的段階は、『社会科学的認識と社会政策的認識の客観性』にはじまり、Verstehen の作用、《理念型》の構成へとすすむ。たんなる実証主義ではなく、ドイツ観念論の過去の痕跡をとどめながら、科学的客観性と価値判断の問題、経験的分析方法の問題に、かれは輝かしい業績を確立した。《理念型》の適用は、かれ自身の宗教的敬虔に支えられて、宗教社会学の領域を新たに開拓していつた。体系的社会学の構想をもちつづけ、ついに

それを果すことなく死後公刊されたものが、『経済と社会』の大著である。ウェーバーは、学究活動にたずさわるかたわら、第一次大戦には軍役に志願し、戦後はドイツ民主党より立候補し、またドイツ共和国憲法起草委員会に参加するなど、実践活動にも貢献した。

以上の巨魁な哲学者や思想家たちより若い世代、すなわち一九〇五年の世代は、危機意識を実感としてもち、みずから第一次大戦で前線の義務を負うたのであつた。かれらは、九〇年代の人びとが理性の可能性を疑うことに限定されていたのに対して、公然たる非合理主義者、あるいは反合理主義者となつていた。一方において迫りくるファシズム的ムードに押しやられ、他方でひたすら精神的復活を求め、この病理的症候のエポックのなかで、多数の作家や文学者たちは、一体自分自身の何の目的に向つて突きすすんでいつたのであろうか。「すべてはミスティークとして始まり、ポリティークとして終る」と書いたペギーは、みずからジャンヌ・ダルクを気取つていたのか、ともかくマルヌの闘いで死ぬ直前、このような詩を書き残している(三五一頁)。

幸いなるかな　偉大なる闘いにて死するもの
神の御前に身をよこたえて

Heureux ceux qui sont morts dans les grandes batailles
Couchés dessus le sol à la face de Dieu.

友人ペギーの死後二週間目に、アラン=フールニェも戦場に果てる。自失の生涯の悲しき断片から、かれの作品の人物 Meaulnes が語るように、死のみが冒険の終りをわれわれにあたえてくれたわけ

である。ジッドとマンは新しい歴史状況に生きて、人間行為の倫理性をぎりぎりに追求し、社会思想と文学との係わり合いのなかで、現代的問題を直視しようとする。戦後文学では、ヘッセの『デミアン』、プルーストの『失われたる時を求めて』、ピランデロの悲劇的戯曲が、二十世紀の人びとの内面的自我を深くえぐり出している。一九一九年から二三年のあいだ、九〇年代の思想家たちは死んでしまう（マイネッケを除いて）。戦後ドイツの無名な思想家シュペングラーの『西欧の没落』は、そのドグマティックなトーン、決定論的な諸仮説、ナイーヴな実証主義への逆戻りにもかかわらず、文明的危機に対する鋭い診断によつて、創造的仕事のエネルギーをもはや消尽してしまつた長老たちよりも、かえつてメランコリーに包まれた当時の読者を共感せしめる魅力をもつていた。

一九二〇年代になると、ドイツではバルトの新正統派、ルカッチの新マルクス主義、シェーラー、フッサール、ハイデッガーの現象学とか実存哲学、ウィーンでは《ウィーン学団》を中心とする論理実証主義が、新しい哲学的関心をまき起した。しかしヨーロッパの哲学は、もはや日常的市民に語りかけなくなつた。他方、二〇年代に小康を得ていたかに見た西欧文明の市民的価値も、戦争そのものによつて脆弱さを暴露し、ボリシェヴィズムの勝利、ファシズム、ナチズムの脅威、忍び寄る経済的不況の波に押し流されていた。三〇年代までに、ヨーロッパ知識人たちは政治的コミットメントを余儀なくせられ、あらためて、知識人の役割はいかにあるべきか、という問題を問わねばならなかつたのである。マンの文学作品のうちには、知識人の限界と困惑が見事に描写されている。バンダの『知識人の裏切り』という書も、現代知識人の悲哀をひしひしと感じさせる今世紀の記念碑であろう。バンダと異つて、マンハイムは、知識人が歴史への参加を意識的に拒否する態度に批判的であり、《アンガジュマン》と自由に浮動する（*freischwebend*）知識人の伝統とのあいだに、知識人の役割を位置づけている。

以上みたように、一八九〇年代の思想家たちのとぎ澄まされた意識は、人間と社会に対する理性と非理性との新しい概念によつてあぶなげな綜合を成就しえたかに見えた。しかし結局のところ、人間理性への不信と非合理主義のなまなましいデフォーメーションを濫えながら、この綜合は二十世紀に持ち越されて分解してしまう。ベルグソンとソレルは社会的神秘主義に屈服する。フロイトも理性の制約を離れ去つて、ついには思弁的想像力に低迷する。パレートは価値が残基的範疇を超えたものとして取り扱い得ることを理解できなかつた。クローチェは、非合理的なものを排除するまでに、歴史家の知的活動を狭隘化してしまう。ウェーバーだけが、かろうじて理性と非論理を思想的一貫性のなかに保持し得たのだが、それは人間が忍苦するには余りにも重いプシュケーの緊張を孕んでいたのである。一八九〇年代の思想革命の形成を顧みて、それが十八世紀の実証主義に対する反抗からはじまり、観念論を復活させて、人間の情緒的価値の回復にブリリアントな知的労働を捧げたけれども、結果的には、人間の精神的価値の永遠性を拒絶する現代の悲劇的現実に帰着したにすぎなかつた。

しかしながら、われわれは九〇年代の人びとの努力が無駄であつたなどというのではない。かれらは、現実の問題解決にふさわしい最終的解答をあたえたのではない。そもそも思想とは deus ex machina ではないのである。かれらの意識は、つねに現実とのあいだの緊張と、《危機》意識とをともなつていたことは、ヒューズの分析によつてあきらかにされた。現実に対する問題の意識が、つねに危機として自覚的に思想家の意識に撥ね返つてこなければ、思想は本物ではない。われわれは、現代の思想史家の意識をみまわすとき、むしろ九〇年代の思想家からのデカダンスの距離を認めないであろうか。この点、ヒューズ自身、現代社会科学の無思想性と科学主義にもつとも傷ましい批判的思想家たろうとしていることをうかがうことができる。結びの言葉をかれの一論文から引いておこう。

「私はつい最近に思弁の長所について論じた。現代の社会科学がとりわけ合衆国において、その本務を十分に果たし得ないでいるのは、まさにこの点だと思う。カール・マンハイムやジョセフ・シュンペーターが世を去つて以来、われわれの時代の社会変化をもつとも広汎な歴史的背景のもとに総括するという、この課題に対して、意欲と能力をあわせ持つものはほとんど見当らない。巨視的な展望を持つ歴史的・経済的社会学の偉大な伝統は、今や消滅に瀕している。それはマルクスと共にドイツに生れたが、同じくドイツにおいて、ナチスがこれにたずさわるもの（たとえばゾンバルト）に道を踏み誤らせ、あるいは見解を等しくする弟子を見出し難い文化的異郷に追放したために、絶望の非運に陥つた。今日では、経済学も社会学もこの任務を果たし得ず、思弁的社会思想の椅子は空席のままである。そして他に権利主張者が見当たらない時に、今やそこに席を移そうとしているのは歴史家である。[3]」

(1) ヒューズは、E・カッシーラーの『啓蒙主義の哲学』からつぎの言葉を引いている。「われわれの現代がかかる自己点検を遂行し、啓蒙主義が作り上げた明るい鏡に自らを写し出してみるべき必要は従来にもまして痛感されねばならぬと私は感じている。……理性と科学を『人間の最高の力』とみなして尊んだこの世紀は、われわれ自身にとつても、過去の失われたものであつてはならない。われわれはこれをあるがままの形において見るばかりでなく、この形状を生み出し形成した根元的な力をもう一度発揮せしめるような道を見出さねばならない――」（中野好之訳Ⅸ―Ⅹ頁）

(2) ヒューズは第三章の「追記」で、グラムシとマルクス主義的ヒューマニズムの問題を取り上げている。二十世紀思想家のうちで、かれはマルクス主義にオリジナルな方向をあたえたものとして注目される。グラムシはトリノ大学にすすみ、実証主義、反マルクス主義的ムードに接触する。と同時に、かれは工場労働者との親密な関係を結び、一九二一年にはイタリア共産党のリーダーに選出される。だが、二六年ムッソリーニに逮捕され、三七年まで牢獄につながれる。われわれは獄中手記の断章から、かれの悲運の思想をうかがえるが、グラムシは現代全体主義に無知であり、マルクス主義のうちにひたすら人道主義的人間解放の理念を求めたのであつた。

(3) H・S・ヒューズ「歴史家と社会科学者」（松浦高嶺訳、『アメリカーナ』一九六一年第七巻一一号、二三頁）

（奈良和重）